

第6回俳句賞「25」選考会ダイジェスト

実際の選考会の様子については、[YouTubeライブのアーカイブ](#)をご参照ください。

第6回俳句賞「25」選考会は2023年3月18日（土）に行われた。本年は4年ぶりに対面での公開選考会（+YouTubeライブでのハイブリッド形式）とし、選考会場には岸本委員、高柳委員、遠藤委員と実行委員会メンバーのほか、応募いただいた高校生のなかから希望者を招いての開催となった。また、選考会は十分な感染症対策の下行われた。予選の結果は以下の通りとなった。

順位	番号	表題	遠藤委員	岸本委員	高柳委員	合計得点
1	17	つつけば	4	4		8
2	6	信号は青	2	2	1	5
3	14	遠霞			4	4
4	1	熟れたるハグ			3	3
4	3	空に刺さって	3			3
4	4	ビル集く		3		3
7	5	平凡			2	2
-*	13	何かの螺子	1	1		2

* 13番『何かの螺子』は応募後に既発表句が含まれていた申告を受け、連作としては失格とした。その他の句は秀逸十句の選考対象には含めている

予選に挙げられた『つつけば』から『平凡』までの7作品についての選考委員の議論は以下の通り。

5番「平凡」について

高柳委員

俳句的でない素材を使っていて評価が高かった。

「アスパラの肉巻きインターハイの朝」はいちおうアスパラが季語だが季感が薄く、韻律も五七五ではない。だが、それが逆に面白さになっている。インターハイの日の朝食という景を詠んだ句はあまりなかったのではないか。

「カップルの後ろに並ぶかき氷」も読者がいろいろな感情を想起する句だと思う。かき氷を楽しみに並ぶ自分と楽しそうなカップルとの間に一体感が生まれている。こうした形での他者との心の交流というのも今までなかったと思う。

「引きこもる十五の夜や鯨の胃」は尾崎豊を想像させる。それだけでは既成の歌詞を引っ張ったに過ぎないが、鯨の胃という着地が意外。季節感はないが引きこもっている孤独感を鯨の胃の中に引き込まれているようだと言っている。こうした比喩的な季語の使用は認めない人もいるかもしれないが、それも承知の上での冒険なのでは。この句から感じられる情緒は冬らしいので、私はこれを冬の句と読んでもいいと思った。やや強引な句もあったが、冒険した上での失敗ととらえれば構わない。それ以上に成果が見られたと言えるだろう。

岸本委員

連作という観点から、配列に工夫が見られた。

「ちゃんちゃんこ祖母の香りに包まれて」の句に続いて「ぐみの実をとって枯れ木のごとき腕」の句がある。するとこの枯れ木のごとき腕はちゃんちゃんこを着た祖母のことだとわかり、イメージが膨らんでくる。

「母さんや新年会の腹踊り」は漫画の中から出てきたようなお母さんである。その隣に「黒豆をつまんで語る父と叔父」の句があり、腹踊りに呆れながら黒豆をつまみ酒を飲む父と叔父が想像される。この父は「ネクタイの曲がりたる父寒の入」の句にも登場している。作者が違うため別のお父さんである可能性もあるが、黒豆を食べていたお父さんが寒い朝にそそくさと勤めに出かけたと思うと面白い。

「引きこもる十五の夜や鯨の胃」には高柳先生と違う感想を得た。私は鯨飲馬食の鯨を想像し、引きこもっている割には食欲があって夜中にカップ麺を食べているような姿を自嘲的に詠んでいて鯨の大きな姿を自分に重ねているようなイメージを持った。

遠藤委員

とても魅力的な作品だと思った。

「平凡」という題を見て、若い人が日常に対して平凡だと感じるのは、私から見れば眩しく、羨ましいと思った。句意がわからないといった点は少なく、気持ちよく読むことができた。10代のいま現在がよく表現されていたし、選考委員のことをあまり気にせずに描けている感じがよかった。

「サイダーの音絡みつく豊かな」「カップルの後ろに並ぶかき氷」「天使の輪さらさらさら髪洗う」「サイダーのボトム膨らむ偏頭痛」「引きこもる十五の夜や鯨の胃」「ネクタイの曲がりたる父寒の入」などの句がよかった。「カップルの後ろに並ぶかき氷」は楽しそうに話す高校生が浮かんだ。「天使の輪さらさらさら髪洗う」はこの年代だからこそ詠める句。「サイダーのボトム膨らむ偏頭痛」も感覚に優れていた。「引きこもる十五の夜や鯨の胃」は鯨の胃の中の孤独を思った。孤独はそんなに悪いモノではないと思う。本当に入ってしまったては困るが、大きな部屋のような鯨の胃の中にはどこか救いもあるような気がした。「ネクタイの曲がりたる父寒の入」は肉親を詠んでいるが面白い。お父さんも嬉しいと思う。高校生らしいというのもちよっと違うかもしれないが、ビビットな作品。

4番「ビル集く」について

岸本委員

感覚が独特だった。

「網代簀や魚のはやさも波のもの」網代簀は魚をとる道具。ここに入ってしまった魚が素早く動いているが、それは魚自身の動きであるだけでなく波の動きがあることによってより速くなっている、ということの書き方が非常に上手い。

「スケートの父の浮き腰なるを抜く」このお父さんは作者から見ると浮き腰、重心が高くてあまり上手くないのでは。そんな父を若い作者が軽々抜いていく。そんな父の姿が俳句として面白い。

「クロッカス母の鼻歌窓越しに」お母さんの鼻歌が窓から聞こえてくる。その辺にクロッカスが咲いている。説明があまりなくシンプルに詠んでいるが、お母さんの姿が浮かび上がってくる。

「夏近いいくつかの名を呼ばぬまま」いわゆる「深読み」に堪える作品。もうすぐ夏が来るがいくつかの名前を呼ばない。何の名前かはわからないが、あるべきもの、くるべきものが来ないままに夏が来ようとしている、という一見抽象的ながらも感情表現として豊かな句だった。

「にはたづみ色づくしやぼん玉の群れ」シャボン玉が水たまりの少し上を通過する時にたくさんのシャボン玉が水面に映って色が変わったように見えたという一瞬の出来事、わずかな時間のことを的確な表現で捉えている。

全体的に物の見方や表現の仕方に優れた作品が多く見られたので高く評価した。

高柳委員

レトリックというか、修辞の確かな句が多かった。

「にはたづみ色づくしやぼん玉の群れ」は実際に色づくということでもないと思うが、あえて誇張している。「なにものも今とんぼうの翅の中」も景色を詠んでいるがやはり誇張がある。どちらの句も、誇張がうまく行っているのではないか。

「スケートの父の浮き腰なるを抜く」は句またがりによる調べのやや不安定な感じが父の不安定な姿勢を再現している。

好きな句では「千羽鶴集めて重し濃紫陽花」。これから千羽鶴を送る前のシーンと読んだ。折った子供たちの思いが形象化、モノとして見えていい。「雨は垂直に勤労感謝の日」も同じく形象化に成功している。

気になったのは表題作「ビル集く空に蜜柑を投げ上げぬ」。集くという動詞は古語だが、ビルに使えるのだろうか？人や鳥や虫などに使うイメージで、ビルに使うのはやや適切ではないのではないか。内容的にはビル群の中で都会生活者の不安が見られて面白いが、やはり少し気になった。言葉が使われてきた伝統・歴史というところを調べて句作ができるといいのかな、と思う。

遠藤委員

季語の取り合わせに詩才を感じる句が多かった。無理なく自然に読ませながら意外性があって面白かった。やわらかさや繊細さは頭ひとつ抜けているのでは。

「おどろけばなほ現るる薔薇の層」丁寧に言葉を紡いでいて完成度が高い。

「千羽鶴集めて重し濃紫陽花」ずっしりとした千羽鶴と濃紫陽花の映像が重なり、通じるところがあると思った。

「跳ねてきて楽譜濡らしぬ雨蛙」どこから雨蛙がきたのかわからないが、雨蛙が楽譜に小さな足跡を残したという様子が楽しく描写されている。

「南風吹く航空障害灯の赤」は航空障害灯という具体的な言葉を使っていて面白い。

「木犀や傾いてゆく筆記体」は季語と筆記体という言葉の取り合わせに詩才を感じた。

「網代簀や魚のはやさも波のもの」もいい写生句。

詩的で魅力的だなと思いつつ、（点を）入れようかな、入れないかな、と迷った作品でした。

3番「空に刺さって」について

遠藤委員

先ほどの4番と対照的。少し強引かなと思うこともあったがのびのびと詠んでいる。

季語や言葉を自信をもって選んでいて、読み応えがあった。いい意味でわかりやす

く、勢いを感じた。中にはどうか、という句もあったが、それを十分補う力があつたと思う。

「折り鶴をほどいて四角春の雪」折り鶴の句は多いかもしれないが、折り鶴を元の四角に開いて戻す感じと春の雪のほんの少し時間が逆行するような感覚が合っていると思った。紙に残る細かい皺も響き合う。

「あのビルを折らうよけふの陽炎に」陽炎だからこそビルを折れそうな気がする。折りたいという衝動とも違う。自然の陽炎もいいが、都会の陽炎も新鮮だった。

「春の風ばやばやとしたパーカーへ」ばやばやというオリジナルのオノマトペがまさしく春の風だという風に思う。

「吸盤の皮蝸壺に漂ひぬ」細かい点に着目しているが、景がよく見えてくる句。

「子子や離島の朝のちよつとはやい」元気よく泳ぐ子子から島の中の辻辻まで見える。夏の朝の嬉しさのようなものも感じられ、季語の選択が良いと思った。「釣船の帰路はゆつくり大暑の日」はこれとペアのような句で、内容も納得できる。

「崇拜のやうに秋桜しなりたる」コスモスの優しい風情をこう捉えた句は見たことがない。やや擬人の感じもして、崇拜のやうというシニカルな言葉も効いていると思った。

「図書館の奥のあかるき冬野かな」これは好きな句。人のいない書庫か書棚の奥がそのまま冬野へと続いていく感じ。俳句ならではの飛躍、詩情があると。

「群れてなほつめたき寒鯉の軀」も寒鯉らしくてよい。

全体的に力を込めて作っている感じがした。わかりにくいと思ったものもあったが、やはり勢いがあっていい。

岸本委員

全体を通して二つの傾向を感じた。

ひとつは「吸盤の皮蝸壺に漂ひぬ」「子子や離島の朝のちよつとはやい」「看板のいつより錆びぬ蓼の花」など、現実の景色をしっかりと見て作ったタイプの作品。

対して「あのビルを折らうよけふの陽炎に」のような句。ビルを折るというのは大変なこと。もちろん心の中で思ったということだろうが、それだけの衝動を心に抱えているということ。「花野風逸詩に王のひとりごと」これは力作。散逸して紛れてしまった詩、これは目の前にはないのかもしれないけど、過去に王様が書いた詩とかがきつとあつたのかもしれない、と風に吹かれながら過去に思いを馳せたのかもしれない。「拾つた虫は火事に燃えてゐるだらうか」どこかで拾つたあの虫が家と一緒に火事で燃えてしまった、こんなことも（実際にも起こりうることはあるが）想像はできる。

また「耳鋭し歌留多を終えてしまらくは」はどちらのタイプにも属さない句。とても感覚が鋭いと思ってチェックした。

連作なので異なる作者の句が混在するのは当たり前だが、特にこの連作は想像力を羽ばたかせた作品と現実を見つめた作品とが、よく言えば対照がきわやかだし、逆に言えば連作としての統一感という観点で戸惑うこともあった。

高柳委員

直観的な把握に長けた、才気のある方が作ったのかなと感じた。

「春の風ばやばやとしたパーカーへ」とパーカーの後ろの部分をばやばやと表現した点や、「曇天の色の消しゴム風信子」で消しゴムの黒ずみを曇天と表したのは非常に独特な感覚で、これを臆することなく打ち出すのには才気を感じた。

「額縁の埃払ひて新茶かな」「耳鋭し歌留多を終えてしまらくは」あたりはかなり点数が高いというか、完成度の高い句で文句なく受け取れると思う。

私としては「あのビルを折らうよけふの陽炎に」「拾った虫は火事に燃えてみるだらうか」あたりはやや読者を置き去りにしているのではないかと思った。面白さや飛躍は認められるが、もう少し読者に歩み寄ってもいいのではないか。独特な感性はともすれば読者を置いて行ってしまうので、そのあたりがこのグループの課題かなと思った。

1番「熟れたるハグ」について

高柳委員

狙っていないところがいい。作者としての狙い、グループとしての狙いがなくてのびのびしていた。

ロシアの映画監督タルコフスキーは悪い映画のことを「スプリングの飛び出したベッドのようだ」という。これは俳句にも通じる言葉だと思う。

その点、この連作はわかりやすく青春性が表出していて狙っている感じがなくてよかったのではないか。

「風船やパーカー腰に結つてゐる」春の日、パーカーを着てきたけど少し暑くなって脱いで腰に巻いた。なぜそこを切り取ったのかあまり露わにせず映像として切り取ったことで作者の意図が見える。

「春天にクレープ生地を広くかな」露天というか空の下で鉄板にクレープを広げて焼いている情景か。これも銜いなく景色を切り取っているが、鉄板に広がるクレープが春の空の広がりを表しているようでもあった。

「彩のなき陽は傾きぬ霜柱」「背の高きゆゑの猫背や冬の雨」も好きな句。背が高いから猫背になるということでもないが、つつい屈む機会が多く猫背が身につくのかもしれない。なんとも言語化し難い感覚を掬い取っていて、これは小説やエッセイといった他のジャンルでは表現できないような良さではないか。

岸本委員

今おっしゃった印象はほぼ同じ。読者に優しいというか、読みやすい印象の作品が多かった。切り取り方が、あちこちからもってくるというよりもありのままの情景を過不足なく17音にまとめたという作品が多かった。「風の吹くたびコスモスは門を出る」「妹に恋人のゐる九月かな」「町工場廃れて今朝の冬の梅」などは読みやすい句。「佐保姫や鏡に花を挿して置く」は鏡に花を挿せるだろうか、とも思うが、すーっと読めてしまう。「一睡の覚めて半量のサイダー」のようなパロディ（「一炊之夢」のパロディであろうか）もあり、読みやすい作品だった。

遠藤委員

お二人と大体同じだが、ある瞬間の情景が鮮度よく切り取られていて、それが案外詩としてのオリジナリティになっていた。意図的でないかもしれないが、季語が言葉に詩情を付与する役割を果たしていた。

「木枯らしやつま先立ちのトイプードル」トイプードルの甘える姿と季語があっている。「背の高きゆゑの猫背や冬の雨」冬の雨としたことで背の高い人の佇まいが彷彿とする。「学友の熟れたるハグ風薫る」自然なハグが季語とよくあっていた。

「春天にクレープ生地を広くかな」高柳さんの意見を聞いて、クレープが春の空の広がりを感じているという視点は自分にはなかったが、そう思うとまた若々しい。なるほどと思った。「すつ転んでも走る走る青芝」やや荒っぽい口語の言葉もよく生きていて、青芝と合っている。「一睡の覚めて半量のサイダー」はリアルな若い世代の日常だと感じた。

読んでいて心地の良い作品だった。

14番「遠霞」について

高柳委員

全体的に着実な取り合わせの句が多く、類想感を脱している。

「木枯らしや割れし定規を買ひ替へに」割れた定規から木枯らしの冷たさや荒々しさ、強さが感じられる。「枝はみな天を目指せり神の旅」「神の旅」の古典性に対して上五中七の描写は非常に現実的。一句に詠み合わせることでストーリーができ

る。「映画またキスシーンなり蜜柑剥く」色恋沙汰とは離れた振る舞いをしているという対比になっている。『ニュー・シネマ・パラダイス』といった作品を連想させる。「妹の寝息やそつと年来る」「そつと」が妹の寝息のかそけさと年が暮れる静かさの両方にかかっている。上手い。

岸本委員

高柳委員の仰る通り取り合わせの手堅さを感じた。他の特徴として、主人公がいて（その視点から）ドラマが滲み出ている。「ぎゅつと抱く祖父の膝もと薄の穂」「映画またキスシーンなり蜜柑剥く」は演出の仕方が工夫されている。

「点滴のわれに寄り添ふ冬林檎」「鶴啼くや友逝きし日の空のあを」「冬服やひとの骸を燃やすてふ」と（死を思わせる）連想感の並びがあることで、次の「木枯らしや割れし定規を買ひ換へに」が意味ありげに見えるし、その延長線上に「妹の寝息」を確かめたり、祠を「こはごは覗き見る」主人公が見える。連作としてひとつの雰囲気がある点が評価できる。

遠藤委員

この連作は、ドラマチックよりむしろ即物的な詩情を目指している気がした。描写を踏み込んだ句として「星流るスペルの違う単語帳」は「スペルの違う」で単語帳が具体的に見える。「木枯らしや割れし定規を買ひ替へに」古い定規ではなく「割れた定規」とすることでモノとして見えやすくなっていた。ある瞬間の印象を非常に鮮明に切り取っていた句として「温水に変はるあはひや冬木の芽」「ペンライト宙に浮き立つ春の闇」も良かった。それぞれの作者がそれぞれの立場で詠んだ句が25句集まっているのが面白かった。

6番「信号は青」について

岸本委員

情景を詠んだ良い句が多くあった。

「夏めくや抜錨の音眼前に」眼前には錨の姿があるが、錨を巻き取る機械の音や水の音といったものまで見えてくる。「腕時計失くして広き花野なり」シチュエーションからひとつの詩情が漂う。「身にしむや他人の犬の嗥れ声」「他人の犬」で余所余所しさやしゃがれ声が際立つ。「初氷踏み抜く今日も同じ道」「踏み抜く」という把握がしっかりと対象を捉えている。「貨物船通り過ぎたり初日の出」ゆったりと詠まれていて正月らしい。

表題作「電線に絡むオリオン信号は青」。オリオンが電線に絡むかのように頭上にある。「信号は青」と、街の景色を書き込んだことによって情景の説得力が増した。情景の出し方、演出の仕方にいろいろと工夫のある作品が多かった。

遠藤委員

岸本さんも仰ったが、しっかりと情景が浮かぶ強さがあった。

「青空が寂しくなりて花筵」明るさの中に寂しさを感じるという（我々に）共通した感情を言い当てている。「夏めくや抜錨の音眼前に」音が眼前にあると詠むことで、読み手に映像を見せている。「夏めく」の期待感もあった。「狂熱に腹の膨るる黒蟻」蟻に抱く印象を「狂熱」という強い言葉でデフォルメしている。挑戦的で良い。「心臓をかつさらわれて驟雨かな」荒削りな口語が「驟雨」に合っている。作者の年代も出ている。「腕時計失くして広き花野なり」言われてみれば納得感があるが、なかなかこうは詠めない。広い花野に喪失感が表れている。

表題作「電線に絡むオリオン信号は青」は実に若々しい。隣に「冬深しあの星も寄り添ってゐる」があることで寄り添う星を本当に見上げているんだなと読める。この並びが互いの句を補完している。

高柳委員

カロリーの高い句と低めの句という二つの傾向を感じた。カロリーが高い（テンションが高い）句としては「飛べぬなら空を落とさん花曇」「狂熱に腹の膨るる黒蟻」「心臓をかつさらわれて驟雨かな」「太陽を前に干柿の胎動」など。

カロリーが低めの句としては「腕時計失くして広き花野なり」「初氷踏み抜く今日も同じ道」「貨物船通り過ぎたり初日の出」。「貨物船」は特にそうだが、日常に少し変化が兆す瞬間を切り取った句に惹かれた。

一方でテンションの高い、荒ぶるような句がこの一連のなかではややうまく機能していないと感じた。

17番「つつけば」について

遠藤委員

季語や詠まれている情景が多彩で、通読すると万華鏡を見ているようだった。

「春といふ大きな鳥に抱かれて」句柄が大きい。春という季節そのものを鳥と捉える視点が新鮮。「チューリップに蜂や銀河に星ひとつ」遠近・大小の対比を超えて若々しい叙情がある。「おとがひに市電の揺れや寒北斗」揺れているのは自分の顎かもしれないし乗っている側の人の顎かもしれない。そうした日常の人の営みを寒

北斗が見守っているような。「春隣帆布の鞆張りつめて」帆布の丈夫で手触りも良い感じが「春隣」という季語と合っている。

「鷹鳩と化して七番線闊歩」「竜天に登る鉄路は湿りつつ」力強いし一句の中の虚実の取り合わせが生きている。「闊歩」が心地いいし「湿る」も春ならではの。

「天国に地面はなくて棕櫚の花」は非常に魅力的で作っている人の楽しさ、思い切りの良さまで伝わってきた。「跳箱を離れ中指秋夕焼」友岡子郷の「跳び箱の突き手一瞬冬が来る」を踏まえている。

全体として訴えかけてくるものもあるし、まとまっていると思った。俳句を楽しんで作っている。

岸本委員

高校生の作品であるということをしつかり忘れて読んだ。読者にどう読ませるかということをしつかり考えて緻密に作り込んだ作品という印象。

「鷹鳩と化して七番線闊歩」「七番線」があるということはかなり大きい駅。目の前にいるのは鳩なので、鳩なら都会の駅にいてもおかしくない。隣の「竜天に登る鉄路は湿りつつ」淵から竜が登るゆえにこれは郊外か。そうしたところの鉄路は草や土に近い感覚だろう…。といった情景が自然と読者に伝わる作り方である。

「つばくらの尾の鋭さに雲二つ」景色としては当たり前だが、それを描き切る作り方に感心した。つばめの鋭い尾が雲を二つに切ったようにも見える。

「天国に地面はなくて棕櫚の花」観念の中の天国が宙ぶらりにならないための仕掛けとして、不気味な存在感のある「棕櫚の花」で受けとめている。

「跳箱を離れ中指秋夕焼」「跳箱を離れ中指」はかなり分析的な描写。

「稔田や指笛に雲ざわめきて」普通ざわめかない雲をどうざわめかせるかという、稲の稔り方であたかも雲がざわめくように感じさせた。

「秋風や地震のはじまる潦」地震のはじまりをどう認識するのだが、その事象を言葉で表そうと頭の中で整理するとこういう句になるのだろう。「秋風」がベストかどうかは再考の余地がある。

「細雪日暮に人を覚えけり」日暮れ時にはじめて人と会ったということだと思うが、その日が細雪の降る一日だったのだという演出が見事。

「おとがひに市電の揺れや寒北斗」「おとがひ」という古風な言葉を使うことで古風な市電を思わせ、「寒北斗」とともに情景が見えてくる。

高柳委員

このメンバーが住んでいる土地柄・風土のようなものが感じられた。あまりこの賞でこれまで出てこなかったタイプ。田舎というよりはやや大きめの地方都市というような。

導入部分は好き。「春といふ大きな鳥に抱かれて」やや抽象的だが大ぶりの句。駅の句が良い。「鷹鳩と化して七番線闊歩」「竜天に登る鉄路は湿りつつ」も線路ではなく「鉄路」で鉄をアピールしているのが効いている。

後半がやや弱いと感じた。「秋風や地震のはじまる潦」これは考えるべき句。多分（地震による）水の揺れを見せたいと思うが、「秋風」を配すると風による揺れとも読めてしまうので、どちらか迷ってしまう。この場合、季語は水の揺れの原因にならないものが良く、風は避けたほうがよい。

各作品の講評の後、上位作品から大賞・奨励賞の検討を行った。

大賞（17番「つつけば」）について

岸本委員

高柳先生は風土性、遠藤先生は作者の存在感、私はむしろ作者を消した技巧の緻密さという評価をした。色々な角度から褒められたということで、候補として有力なものではないか。

遠藤委員

話を聞いて風土詠としてのよさ、巧さも感じた。私はそこまで分析的に作ってはいないのでは、と思う。もちろん推敲はしているだろうが、直感的に言葉を吟味しているのでは。結果としてまとまった句に仕上がっている印象で、一連の句には作者の姿が見える。10代の世の中の見方というのを感じた。よくよく見ると季語とその他の部分の取り合わせなどが非常に効果を持って働いているが、私は（そこに技巧は）感じなかった。作者もそう読んでほしいと思っているのではないか。好きな一連だった。「細雪日暮に人を覚えけり」はすごく巧い。「秋風や地震のはじまる潦」も直感的に作っているのでは。

高柳委員

「平均点」を見ていくという決め方もあるとは思いますが、私は優れた句がどれだけの鮮度であるかというところから決めていきたい。その点で17番には突出した句が多かった。スフィンクスの句や表題句「嘴でつつけば火事になったらし」など分かりにくい句もあったが、「鷹鳩と化して」「竜天に」など押してくる良句が多かった。

これだけ高いレベルの中で二人の委員が一席に推しているということで大賞にして異存はない。

以上の議論により、大賞は17番「つつけば」に決定した。

奨励賞（6番「信号は青」、14番「遠霞」）について

遠藤委員

6番「信号は青」には三人が点を入れているし、14番「遠霞」には高柳先生が一席で推しておられる。どちらも重要なので、両方で良いのでは。

岸本委員

はい。仰る通りだと思います。

高柳委員

6番「信号は青」は確定かと。問題は私が推している14番「遠霞」かと思いますが…。

遠藤委員、岸本委員

良いのではないのでしょうか。

以上の議論により、奨励賞は6番「信号は青」と14番「遠霞」に決定した。

また選考会中では、予選に残らなかった作品の中で目についたものについても、以下のような各選考委員のご意見をいただいた。

岸本委員

比較的○印をつけた句が多かったのは7番「四季に色」。「部室棟歩めば軋み法師蟬」「秋澄むや騎馬の上から見る校庭」「赤蜻蛉背面跳びの腹を行く」「银杏黄葉のせてブランコ夜の風」「病棟の手摺の温度冬近し」「バイク発つ音を布団の中で聞く」など、一人の作者が日記を綴っているような感じがした。個々の作品にもいい句が多かった。

高柳委員

どうしても全体で評価すると気になってしまうが個々の作品で気になる、というのはあった。挙がっていないものだと8番「合鍵」。

なんでもスマホやコンビニといったものを詠めばいいというものでもないが、「病室より花の便りをツイート」の句は実際にありそうな中で「病室より」というのが個別性あって面白かった。

「スクランブル交差点蠮螋を無視」も、そんなところにカマキリいるかな？とも思ったがまあそんなこともあるだろうと。妙な臨場感があって好きでした。

9番「一週間を拾う」も、やや言葉遣いが乱暴なところもあったが味があってよかった。「課題終えもうサザエさん？秋の夕」には？マークは要るかなとも思ったが意外で面白かった。マークも効いているのではないか。

10番「燃え上がる」にはとても好きな句があった。「雪の田や静かにひらくバスのドア」全体的に都会詠が多かったがこうした広々した田舎の句がよかった。少ない人数が乗り降りする田舎のバスと雪の田の静けさが響いていた。

キリがないのでまた後で時間があれば紹介したいが、どの作品にも1つ以上紹介したい句があって嬉しい限りだった。

遠藤委員

お二人がおっしゃった通り、個々の句には丸をつけたい作品が多くあった。中でも多くつけたのは12番「揺らぎ」。従来にない風通しの良い詩情があった。

「目が覚めてキャンプの土の冷えほのか」非常に繊細でよく表している。「なつかしさとほつちかぜの滑走路」滑走路の様子を「なつかしさ」と詠んだのは独自の視点で、妙に実感があり面白かった。「春時雨伏してLINEのバイブ待つ」LINEを待つ、ではなくバイブまで詠むことで情景がスッと浮かぶ。「フクロウに後光の差して夜を飛ぶ」フクロウというイメージの強い季語に凭れないようにあえてカタカナにしているのかなと思った。一つの野生生物としてシンプルに詠んでいる。「砂散らすウミガメの子や空の藍」これも動物をカタカナで呼んでいる。言葉の選び方に工夫が見られた。

お二人も挙げていた10番「燃え上がる」もよかった。人間の体温が伝わってくるような感じがした。「全身で階段登る子や土筆」最後の土筆の置き方はテクニカルな印象を与えるところだが、この句の場合はそうではなく土筆がただ良いと思った。

「雪の田や静かにひらくバスのドア」これは高柳さんと同じですごく好きだった。

それから7番「四季に色」もよかった。

「おおつぶの葡萄のような目をしたる」誰の目が大粒の葡萄のようなのかとは言っていないが、そんな目をした相手を思う気持ちがさりげなく描かれている。葡萄を

比喩で使っているが、季語を比喩で使ったから弱くなるという意見もあるけれど、一句の中でその季語に存在感があれば私はあまり気にならない。好きな句でした。

「バイク発つ音を布団の中で聞く」「冬晴れの早朝にしか聞けぬ音」はこの二句が並んでいるのがいいと思った。冬晴れの朝の音はバイクの音ではないかもしれないけど、朝にしか聞こえない色々な音を想起させて、それが二つ並ぶことで相乗効果になっているのではないか。

最後に、各委員から総評が行われた。

遠藤委員

高校生の方々のレベルが上がっており、読み応えがあった。今回は違ったが、句会となると作句だけでなく、選評もすることになる。選や選評は作句意図が的確に相手に伝わったかを確認するという点で役に立つが、万能ではないと思う。人の選を聞いて「なるほど」と納得するだけでなく「わかってないな」と思う精神も大切。まだ若い皆さんには自分を大切に、作句を続けてほしい。

岸本委員

俳句は短い。作品を読みながら二つのことを考える。第一に、言葉の組み合わせが上手くいったときには爆発力がある。まず、それをしっかり見つけたい。第二に、短さゆえなかなかものが言えないという面もある。しかし今回の場合は25句の連作なので、連作の効果を生かして一句だけでは表現しきれない何かを立ち上らせることもできるだろう。一句一句の瞬発力と25句全体の醸し出すものの両方を楽しませてもらった。

高柳委員

「写実」を考えてほしい。我々は子規・虚子と続く写実の歴史の先に位置している。今回の賞でも、彼らが大事にした実感や質感が出ていた句が高い評価を受けていた。どのような道筋を行くにしても、最初に「よく物を見て、細かいところまで着眼し、言葉にする」という写実の門をくぐってほしい。連作の中でも、ひとつふたつ説得力のある写実句を入れると良いだろう。